

[音律構造図]

左上:Strasbourg
1488年 ピタゴラス音律

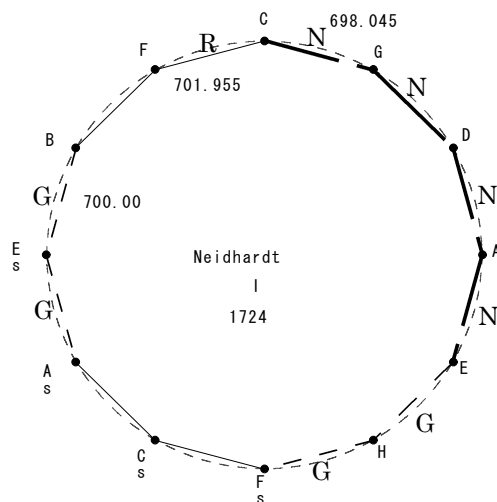
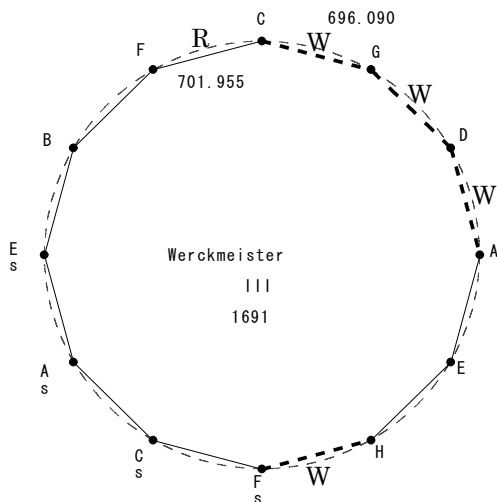
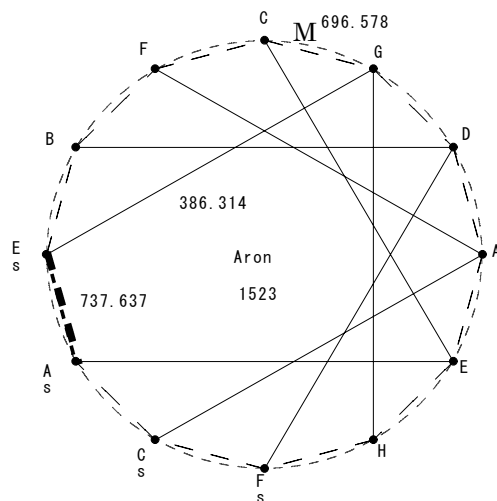
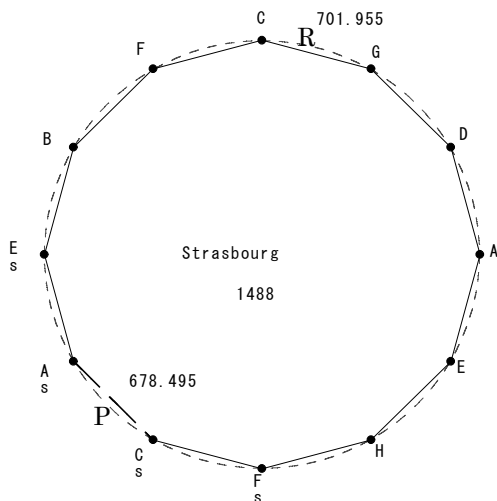
右上:Aron
1523年 中全音律

中左:Werckmeister III
1691年 不等分音律

中右:Neidhardt I
1724年 不等分音律

左下:Kirnberger III
1779年 不等分音律

右下:12等分平均律



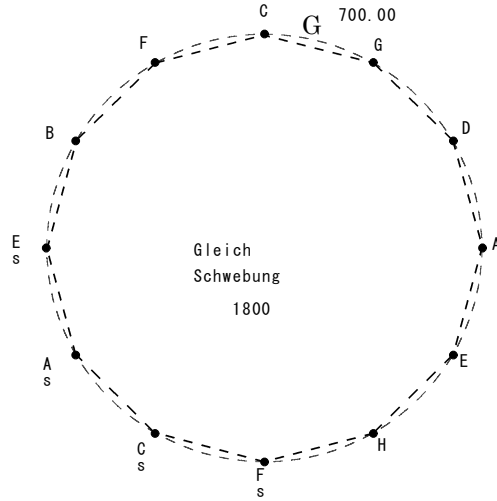
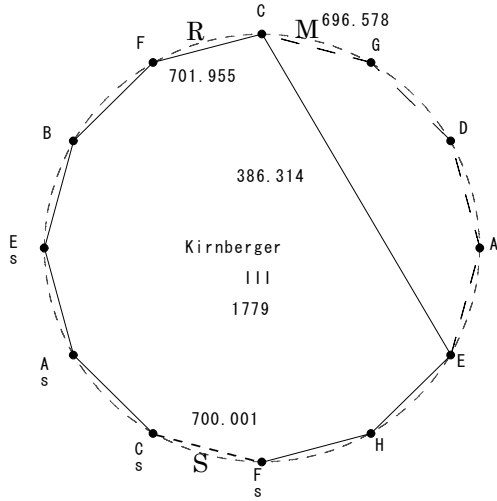
[音律の歴史]

* 14~15世紀
ゴシック時代
<ピタゴラス音律>

* 16~17世紀
ルネッサンス時代
<中全音律>

* 18世紀
バロック時代
<不等分音律>

* 19世紀
クラシック時代
<平均律>



[音律特性グラフ]

《長嶋洋一氏考案》

内側点線円を基準0φとし、外側点線円を20φとする。純正長3度、あるいは5度からの音程差をグラフに表す。実線は基準音とその5度上の音と、破線は長3度との音程差を表す。例えば、C音とG音が純正な5度、すなわち音程値702φであれば、内側の0φの位置となる。また、C、E間の音程がピタゴラス3度、408φになる場合、純正長3度の音程値、386φとの差は22φになり、グラフ線は外円の外に出る。

